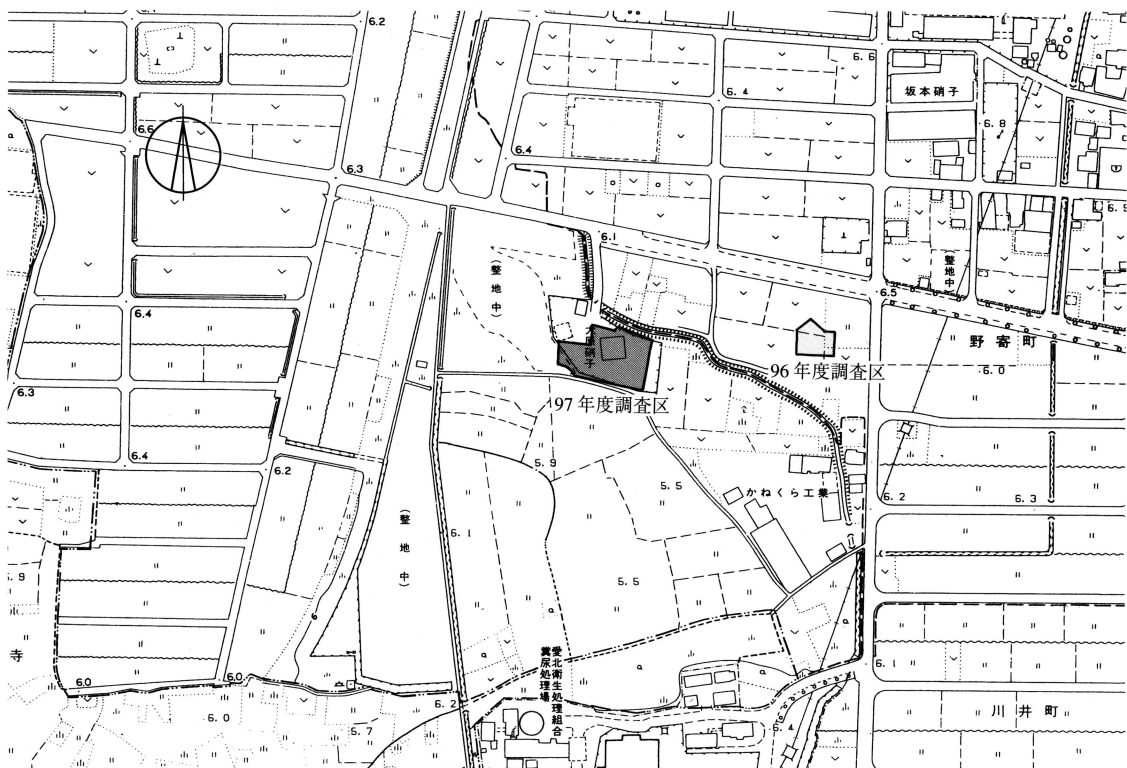


ごんげんやま
権現山遺跡

調査の経過 権現山遺跡は、岩倉市の南西部にあたる北島町および野寄町地内に所在し、五条川右岸に形成された自然堤防上に立地している。周辺には元屋敷遺跡（一宮市）、北島白山遺跡、大地遺跡など縄文時代から弥生時代にかけての遺跡や稲荷山古墳（一宮市）、高塚古墳（西春町）などの古墳が多く存在している。

発掘調査は五条川右岸浄化センター建設に伴う事前調査として、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として平成8年度より実施している。昨年度は本調査と範囲確認調査を合わせて500㎡実施し、古墳時代初頭の墳丘墓の存在が明らかになった。本年度はその西側にあたるガラス工場跡地1,800㎡を7月から10月にかけて調査した。

調査の概要 今回の調査で確認された遺構・遺物は、縄文時代後期（Ⅰ期）・弥生時代後期～古墳時代初頭（Ⅱ期）・古墳時代後期（Ⅲ期）・奈良時代後期（Ⅳ期）・江戸時代後期以降（Ⅴ期）の5時期に区分される。昨年度の調査では主にⅡ期の遺構が検出されたが、今回の調査で新たにⅠ・Ⅲ・Ⅳ期の遺構を確認したことにより、本遺跡が幅広い時代にわたる複合遺跡であることが明らかとなった。特に、濃尾平野において縄文時代後期（Ⅰ期）の遺構・遺物が良好に検出された希有の事例として、今回の調査成果は今後の研究に大きく寄与するものになると思われる。加えて、古墳時代後期（Ⅲ期）に属する古墳が確認されたことにより、五条川流域に形成された古墳群の動態を知るうえでの資料が得られたほか、Ⅱ期の大型墳丘墓は、造営後に改変が行われた一事例として注目される。



第1図 調査区位置図（1：5000）

I 期

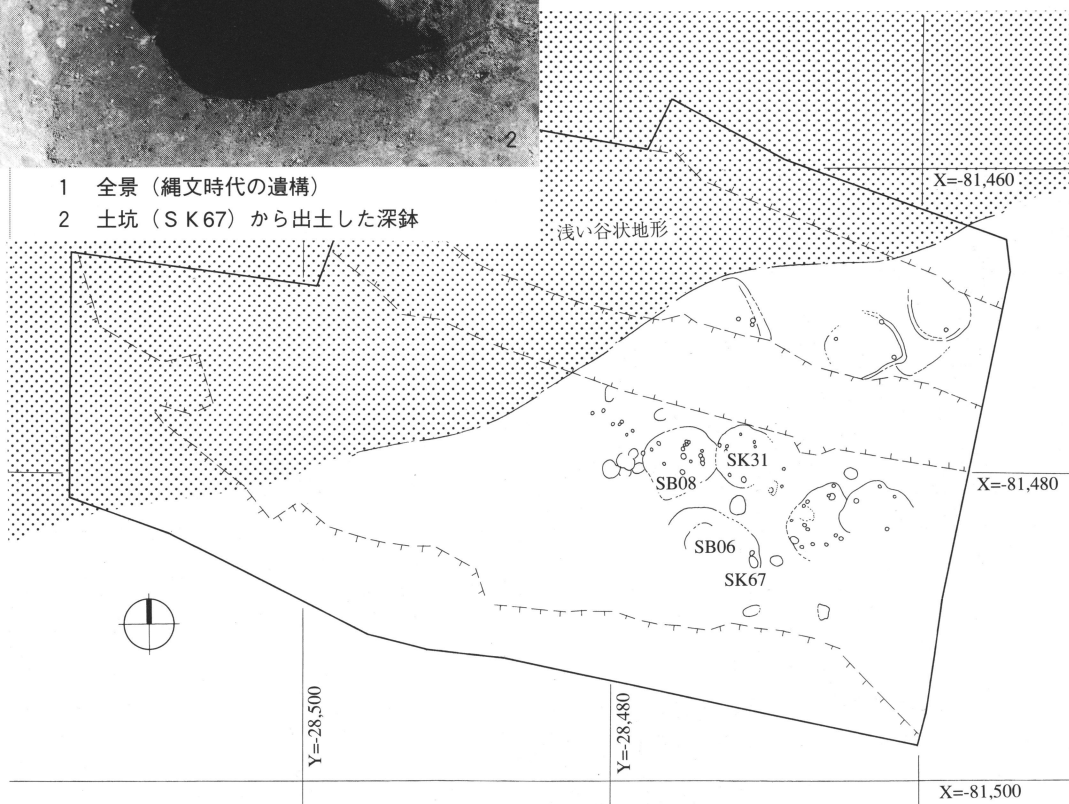
I 期の遺構は調査区の南東部分で竪穴住居8棟、土坑群が検出された。一方、調査区の北西部分は浅い谷状の地形となるが、縄文時代後期の土器（一部晩期の土器を含む）を良好に包含していた。竪穴住居の平面形は後世の削平のため判然としないものが多いが、円形



1 全景（縄文時代の遺構）
2 土坑（SK67）から出土した深鉢

もしくは不整な円・方形を呈するとみられ、4～5mの大きさを測る。SB08は検出面からの掘り込みが約30cmと最も深く、浅い掘り込み状の炉、貼床も確認された。SB06には住居址の一隅に炭化物で充填された土坑（SK67）があり、深鉢が縦に半截されたのちに伏せられた状態で出土した。小型の竪穴住居の可能性もある直径約3mの浅い円形の土坑（SK31）には遺物が多量に廃棄されており、上下の層位間で接合する土器の破片も多いことから、比較的短期間の廃棄とみることができよう。

遺物には深鉢をはじめとする縄文土器（後期前葉が主体）、石鏃、石錘などの石器、多数の剥片などがあり、竪穴住居からの出土は少ないものの、土坑からは比較的まとまった出土がみられた。



第2図 I期遺構図（1：500）

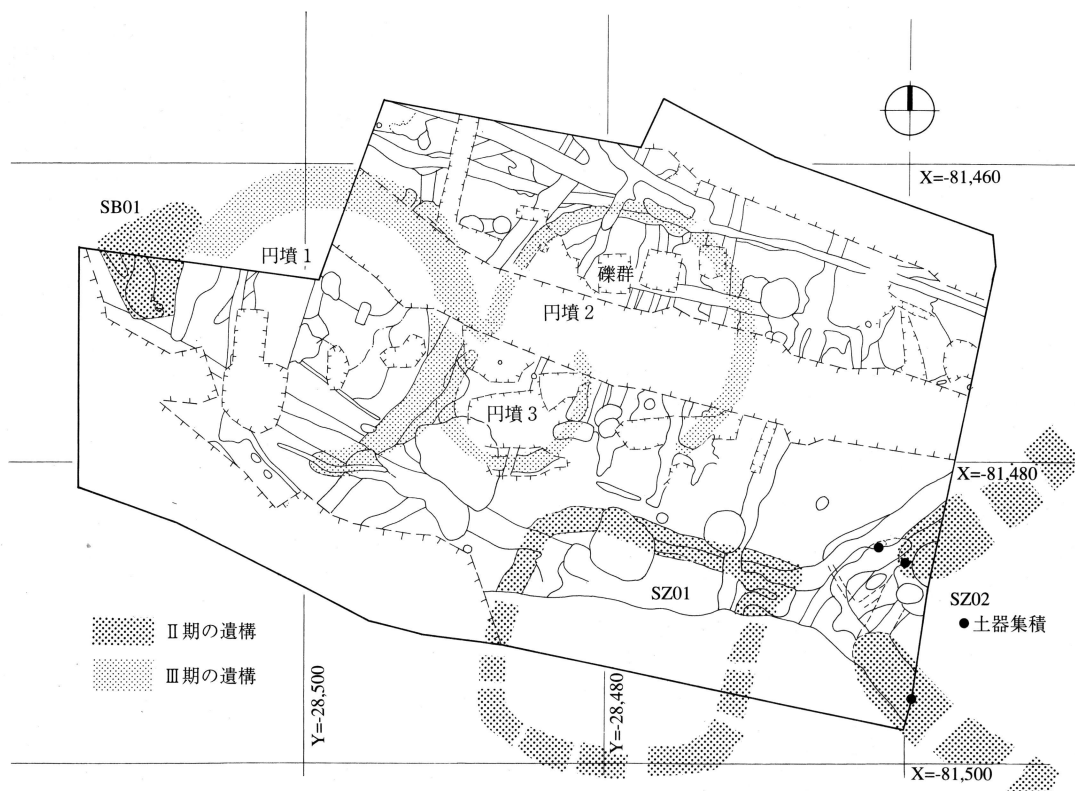
Ⅱ期

Ⅱ期の主要な遺構としては墳丘墓2基（SZ01・02）、竪穴住居1棟（SB01）がある。昨年度の成果も合わせると、この時期の墓域と集落域は遺構のやや希薄となる部分を挟んで東西に展開すると考えられる。SZ02は南西隅付近の周溝の一部を検出したにとどまるが、周溝の深さは約1.5m、幅は5m前後で、この時期の墳墓としてはかなり大型の部類に属するものとみられる。また周溝の開口部には、周溝が完全に埋没する以前に溝や土坑が繰り返し掘削されたのち、幾度かにわたって土器廃棄が行われたようである。また、周溝の埋土は明瞭に3層に区分することができ、周溝から出土した土器には山中式後期から廻間Ⅰ式までのものが含まれることから、SZ02がある程度の時間幅のなかで機能していたことをうかがわせる。SB01からは、廻間Ⅰ式に属する甕、高杯などの良好な一括資料が得られた。

Ⅲ期

Ⅲ期の遺構には円墳3基がある。直径約15mに復原できる円墳1の中央では、川原石を使用した横穴式石室の一部を確認した。石室は南西方向に向けて開口していたとみられ、玄室の内法幅は約1mと小型である。石室の壁体としては、1段目の石材がわずかに遺存していたにすぎないが、床には礫が敷かれており、礫の直上から鉄製刀子1点が出土した。また須恵器の蓋杯が、石材を抜き取った際に抜き取り穴に落ち込んだ状態で出土し、墓坑の埋土からは須恵器の提瓶の破片が出土した。

円墳1の周溝のほかにも弧状を呈する溝が数条認められ、切り合い関係から古墳の周溝と判断される。円墳3の溝の上層には川原石が集中して検出される部分があり、古墳の破壊が比較的早い段階に進行していたことを表わしている。



第3図 Ⅱ～Ⅴ期遺構図（1：500）

Ⅳ・Ⅴ期 Ⅳ期の主要な遺構には大溝2条と、竪穴住居1棟がある。大溝は幅約1～2m、深さは最大で約1mを測り、Ⅱ・Ⅲ期の溝を再掘削するようなかたちで掘られている。大溝や竪穴住居から出土した須恵器は折戸10号窯式を中心とし、杯、蓋、鉢、甕、長頸瓶など、器種も比較的豊富である。

Ⅴ期の遺構としては屋敷を区画する溝、井戸があり、そのほとんどは19世紀後半以降に属するものである。これは明治17年の地籍図に「宅地」と表記されていることとも一致する。
(大崎正敬・早野浩二)



- 3 S Z 02南溝の断面
- 4 S Z 02開口部への土器廃棄
- 5 円墳1全景
- 6 円墳1から出土した刀子
- 7 全景(古代・近世の遺構)